

令和 5 年 6 月 23 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20H01207

研究課題名(和文) 絵巻制作による初期本願寺の「自己像」構築 南北朝時代京都の文化政治と表象戦略

研究課題名(英文) Constructing the 'Self-image' of the Early Period Hongwanji through the Illustrated Biography of Priest Kakunyo (Bokie)

研究代表者

池田 忍 (Ikeda, Shinobu)

千葉大学・大学院人文科学研究院・教授

研究者番号：90272286

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、14世紀半ば、観応の擾乱の只中における京都・東山の初期本願寺によって、詞と絵からなる複合的表現媒体である絵巻が選択され、場面の取捨選択、画面構成や表現の吟味、詞書執筆者の依頼を経て、「慕帰絵」完成にいたるまでの一連の過程を解明をめざした。加えて絵巻が受容される環境に目を向けることで、美術が有する社会的機能と役目を考察した。具体的には、1) 建築表現、2) 女性や稚児の表象、3) 制作環境としての都市、以上の三つの視座を設け、『慕帰絵』の企画・制作者らが直面していた「現実」と「理想」のギャップを考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、中世絵画の基準作で、建築・生活を詳細に描くことから絵画史料として重用されながらも、史料批判が尽くされていない『慕帰絵』を中心に、各地の真宗門流の求めに応じながら初期本願寺が関与した各種の親鸞伝絵(絵巻)および親鸞絵伝(掛幅)他、各宗派・諸寺院で制作された諸作品との比較を通じて、中世高僧伝絵の表現の特徴と意図の解明を試みた。美術史・建築史・歴史学の研究者の共働を通じて、絵画表現と同時代の都市空間や建築の実態、史実とを照合し、注文主の意図に基づく作為を抽出する分析方法を吟味・追求した本研究は、同時代における絵巻の社会的機能に関する考察に寄与するという点からも汎用性の高い議論を提示した。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on Boki-e, a mid-14th century pictorial biography of the monk Kakunyo, the third abbot of Nishi Honganji. Through an analysis of how the people and places in Kakunyo's life were depicted, the goal was to elucidate why the scrolls were made. First, we did a close comparative analysis of the Boki-e text with Saishu kyojyu ekotoba, a contemporary biography of Kakunyo composed by his disciple. Second, we examined the portrayal in Boki-e of key architectural spaces associated with Kakunyo, such as the settings for the poetry gatherings he hosted, his private retreats, or Otani Mausoleum in Kyoto's Higashiyama district. We found that the Boki-e scrolls made use of textual and visual images that would have been familiar to Honganji adherents and other Kyoto residents of the day, creating a persuasive reality of sacred space that would foster their acceptance of Kakunyo and his successors as legitimate spiritual leaders in the Kyoto cultural milieu.

研究分野：美術史

キーワード：絵巻 宗教史 都市史 建築史 『慕帰絵』

## 1. 研究開始当初の背景

『慕歸絵』は、本願寺第三世・覚如(1270~1351)の伝記絵巻で、制作年代、および二名の絵師の分担が判明する中世絵画の基準作として知られる。これまでも研究は蓄積され、重要な指摘がなされてきたものの、制作事情や環境の解明には未だ至っていない。一般には、覚如の宗教的事跡を主眼とせず、歌人としての風雅な行状を熱心に描く点が特徴とされる。また建築・生活を詳細に描くことから絵画史料として重用されるものの、表現についての包括的な研究、史料批判は十分に行われてこなかった。本科研では先に科研費の助成を得て、覚如ゆかりの「人」と「場」の描写の検討を通じ、その制作目的の解明を試みた。

具体的には、美術史・建築史研究者の協働により、詞書や史実、別様の覚如伝である『最須敬重絵詞』、同時期に制作された親鸞伝絵や肖像画などと照合しつつ考察を進めた。ことに、京都東山の太谷房、覚如の隠居所や歌会開催の場、訪問先等の建築と空間の描写を、同時代における京都の都市景観や建築の実態と照らし合わせ、そこに配置された覚如と他の登場人物の造形表現の検討を重ねた。これによって、『慕歸絵』企画者による太谷房、および覚如像構築に際しての表現操作、演出の解明に一定の成果を上げ報告書(『慕歸絵』の制作事情をめぐる総合的研究

覚如像の構築と建築表現に注目して)(平成28年度~30年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書 研究代表者 池田忍)を刊行した。

## 2. 研究の目的

本研究では、14世紀半ば、観応の擾乱の只中における京都・東山の初期本願寺によって、詞と絵からなる複合的表現媒体である絵巻が選択され、場面の取捨選択、画面構成や表現の吟味、詞書執筆者の依頼を経て、『慕歸絵』完成にいたるまでの一連の過程の解明をめざす。加えて絵巻が受容される環境に目を向けることで、初期本願寺の指導者層による絵巻制作の目的を明らかにし、美術が有する社会的機能と役目を考察する。

## 3. 研究の方法

具体的には、1)建築表現(例えば、理想の住まいとしての「閑居」や複数の歌会の場など)と背景となる文化的価値の検討、2)女性や稚児の表象にみる中世のジェンダー秩序、3)新旧の仏教勢力が共存・拮抗した南北朝時代の京都という絵巻の制作環境、以上の三つの視座を設け、『慕歸絵』の企画・制作者らが直面していた「現実」と「理想」のギャップを考察した。

## 4. 研究成果

1)建築と環境:『慕歸絵』8巻2段に描かれた太谷房の「竹杖庵」と呼ぶ覚如の隠居所の描写について、同時代の高僧伝絵巻との比較により、建物の正面側に出文机を設けて庵名の額を掛け、縁に關枷棚を置く点から、仏間と居間(学問所)による構成と推測できることが明らかになった。これは同時代の遁世の庵室の典型であり、竹杖庵が、遁世者として学芸に勤しむ覚如の資質を象徴する住まいとして描かれていること、本絵巻の他の段においても建築や環境描写によって念入りに構築される覚如像と矛盾がないことを確認した。

2)模本調査:2022年3月11日に、東京国立博物館の許可を得て、同館所蔵「慕歸絵(模本)」(永井如雲・木本高嶺・石原重盈 明治時代・19世紀、全10巻)の調査・撮影をおこなった。文献調査や東博研究員の土屋貴裕氏による情報提供を通じて、模本制作者の事績、模本制作の背景、来歴についての情報の蓄積と整理を進めた。また熟覧と撮影写真の検討を通じて、模本の制作姿勢にとどまらず、原本制作時の構図変更、細部描写に関する重要な知見を得ることができた。模本と原本の展示歴などに関する史資料の調査を継続しているが、いまだ成果公刊に至っていない。

3)関連領域の研究状況への寄与:本研究の実施期間に親鸞および初期真宗門流の研究は急速に活性化した。宗教史にとどまらず、真宗門流の継続と発展と不可分の関係にあった多様な絵画や彫刻の研究が蓄積されている。ことに2023年3月には京都国立博物館にて「親鸞 生涯と名宝」、龍谷ミュージアムにて「真宗と聖徳太子信仰」と題した二つの特別展が開催され、講演会やシンポジウムを通じて活発な議論が展開した。また『親鸞・初期真宗門流の研究』(同朋大学仏教文化研究所編、法蔵館、2023年3月)という大部の論集が刊行されている。同書には、本科研の分担者である美術史研究者の村松加奈子氏が寄稿し、また2023年5月20日に龍谷ミュージアムで開催された学術シンポジウム「聖徳太子と真宗の文化遺産 秘伝・凶像と信仰の世界」にもコメンテーターとして登壇している。村松氏の研究により、14世紀の初期真宗門流における旺盛な絵画制作を担った絵師(工房)の実態解明が進められている。上記の展覧会や研究集会において、親鸞の血脈に連なる初期本願寺がさまざまな主題・形態の絵画を信仰と布教の要に据えていたこと、本願寺第三世とされる覚如やその子の存覚、従覚、また孫で第四世となる善如による絵画制作への関与については言及されるものの、『慕歸絵』という絵巻は相対的に等閑視さ

れている。上記の展覧会にも、『慕帰絵』は出品されなかった。しかしながら、真宗の生成期におけるマクロ(全国に広がる真宗門流のネットワーク)、ミクロ(京都東山における初期本願寺)それぞれの活動と両者の関係を解明する上で、『慕帰絵』は極めて重要な位置を占める。本研究では期間内に十分な成果を公刊するに至らなかったが、これまでの成果を踏まえ、引き続き議論を深めていく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 池田 忍	4. 巻 301
2. 論文標題 「女絵」の生成と継承、そして転生 / 今へ 物語を読みほく	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『表象と批評 脱 / 中心化の営みとして 』（千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書）	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辰巳綺菓・小沢朝江	4. 巻 F-2分冊
2. 論文標題 近世における門の建築彫刻の題材選択とその意味	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 859-860
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 村松加奈子
2. 発表標題 播磨の聖徳太子絵伝
3. 学会等名 2022年播磨学特別講座「聖徳太子と播磨」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 赤澤真理
2. 発表標題 江戸時代前期の源氏絵に示された建築空間 格式表現の獲得から多様性へ
3. 学会等名 第8回源氏絵データベース研究会、シンポジウム「桃山・江戸時代源氏絵研究の最前線
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大田壮一郎
2. 発表標題 初期室町幕府の宗教政策を支えた人々 奉行人・三条殿・石清水
3. 学会等名 歴史学研究会中世史部会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大田壮一郎
2. 発表標題 北摂の寺院と室町幕府 勝尾寺・箕面寺を中心に
3. 学会等名 令和3年度秋季市民文化祭歴史講演会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大田壮一郎
2. 発表標題 知られざる宗教都市奈良 日本中世史の謎を解く
3. 学会等名 立命館オンラインセミナー
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 松村秀一、稲葉信子、上西明、内田青蔵、桐浴邦夫、藤田盟児、日本建築和室の世界遺産的価値研究会	4. 発行年 2022年
2. 出版社 晶文社	5. 総ページ数 256
3. 書名 和室礼讃	

1. 著者名 大田壮一郎・早島大祐・松永和浩・吉田賢司編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 276
3. 書名 『京都の中世史5 首都京都と室町幕府』（担当：pp.80-137）	

1. 著者名 村松加奈子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 302
3. 書名 「四天王寺の中世太子絵伝」（pp.175-182）（監修：石川知彦 編集：和宗総本山 四天王寺『聖徳太子千四百年御聖忌記念出版 聖徳太子と四天王寺』）	

1. 著者名 村松加奈子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 302
3. 書名 「「四天王寺絵所」の謎」（pp.180-186）（監修：石川知彦 編集：和宗総本山 四天王寺『聖徳太子千四百年御聖忌記念出版 聖徳太子と四天王寺』）	

1. 著者名 村松加奈子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 日本経済新聞社	5. 総ページ数 357
3. 書名 「融合するふたつの絵伝 聖徳太子絵伝と善光寺如来絵伝」（pp.271-273）（編集：和宗総本山 四天王寺、大阪市立美術館、サントリー美術館『千四百年御聖忌記念特別展 聖徳太子 日出づる処の天子』）	

1. 著者名 村松加奈子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 同朋出版	5. 総ページ数 508
3. 書名 コラム「諸家分蔵本「拾遺古徳伝絵」について」(pp.477-484)(同朋大学 仏教文化研究所編 『親鸞・初期真宗門流の研究』)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小沢 朝江 (Ozawa Asae) (70212587)	東海大学・建築都市学部・教授  (32644)	
研究分担者	赤澤 真理 (Akazawa Mari) (60509032)	大妻女子大学・家政学部・講師  (32604)	
研究分担者	大田 壮一郎 (ota Souichiro) (00613978)	立命館大学・文学部・教授  (34315)	
研究分担者	亀井 若菜 (Kamei Wakana) (30276050)	滋賀県立大学・人間文化学部・教授  (24201)	
研究分担者	村松 加奈子 (Muramatsu Kanako) (40707973)	龍谷大学・公私立大学の部局等・准教授  (34316)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	中村 ひの  (Nakamura Hino)	小平市はげの森美術館・学芸員	
研究協力者	猪岡 萌菜  (Inooka Moena)	成田山霊光館・学芸員	
研究協力者	藤田 紗樹  (Fujita Sakiaki)	文化庁・文化財調査官	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------